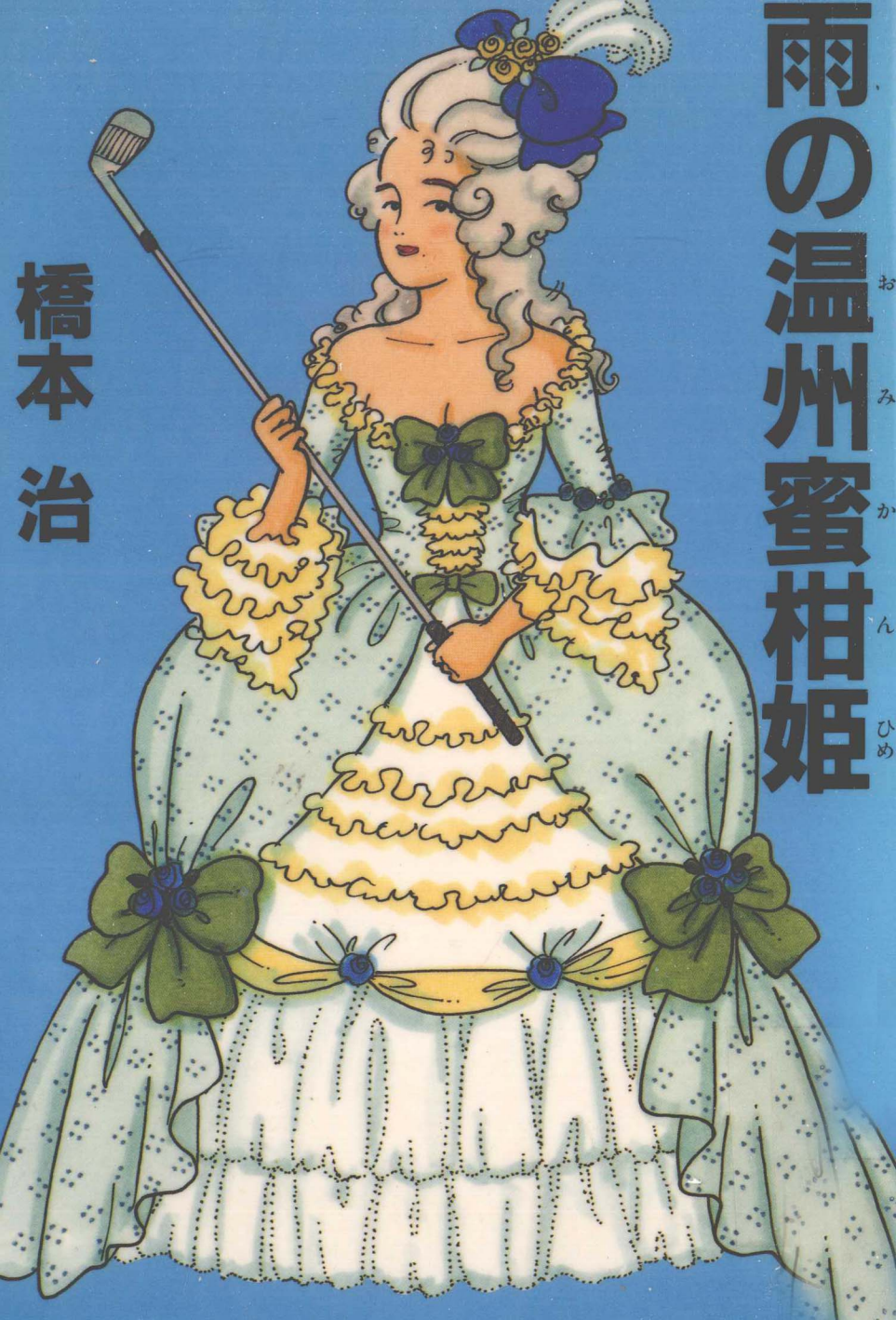


雨の温州蜜柑姫

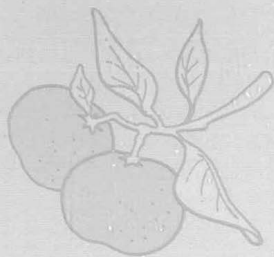
お
み
か
ん
ひ
め



橋本治

雨の温州

おみ



「第一話 雨の温州蜜柑姫」は一九八一年「小説アクション」二号掲載の同名作品を大幅に書きかえました。他はすべて書下ろしです。

雨の温州蜜柑姫

定価 九五〇円（本体九二二円）

著者 橋本 治

一九九〇年九月十七日 第一刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一二二―〇一

電話（〇三）九四五―一一一（大代表）

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

© OSAMU HASHIMOTO 1990 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本に

ついてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願

いいたします。

目次

第一話 雨の温州蜜柑姫 7

第一章 雨の午後は霧に昏れて 9

第二章 長いおしたく 22

第三章 淑女に罵声は似合わない 26

第四章 戦車競走には早すぎる 32

第五章 夜へのみじかい旅 45

第二話 夜の温州蜜柑姫 47

第一章 摩天楼は琥珀の吐息 49

第二章 続摩天楼は琥珀の吐息 54

第三章 続々摩天楼は琥珀の吐息 59

第四章 続々々摩天楼は琥珀の吐息 65

第五章 許されぬ愛に燃えて 67

第六章	愛は霧の中に	68
第七章	美しき惑いの横顔	72
第八章	許されぬ宿命の絆 きずな	76
第九章	再び愛は迷える霧の中に	80
第十章	めざめの時	83
第十一章	訪れ	85
第十二章	流されて	88
第十三章	二人の女	99
第十四章	春の夜空に星は瞬く	104
第三話	春の温州蜜柑 おみかん 姫	105
第一章	春の日の訪れははまだ遠く	107
第二章	小雪舞う燈火 ともしび は幻のエトランゼ	110
第三章	醒井涼子が学問に目覚めたその由来	117
第四章	ある日突然、アニー・サリヴァンは醒井涼子の目の前に現れる	

第五章

ああ、デイヴィッド、私を離さないでいておいて！
——あるいはまた、恋と哲学の關係について

126

第六章

人生は不思議の国のアリス

136

第七章

「ふーん」と言つて中を覗けば

144

第八章

ベンチ

150

第九章

晴れた日には中世が見える

155

第十章

私をボートに乗せてみて

158

第十一章

オックスフォードでも雨はおもに広野に降る

165

第十二章

学園生活は楽しい

168

第十三章

暗雲は東から忍びよる

175

第十四章

涼子さん、冗談じゃありませんよ

179

第十五章

涼子、お母さんは泣いているぞ

186

第十六章

春の日の訪れは再びいまだに遠く

189

第四話

扉を開ける温州蜜柑姫

191

第五話 港が見える温州蜜柑姫

207

第一章 春の波止場でなにかが生まれる

209

第二章 さまざまな偶然は、さまざまな選択を招く

211

第三章 あまり好きではないのだけれど

218

第四章 春には氷柱がとけてゆく

222

第五章 ちよつとだけ首をひねって、それぞれに

226

第六章 白い孔雀貝

231

第七章 坂の途中で偶然が駆け降りて、その時少しだけ時間が停まる

236

第八章 だけでもう、僕の時間は進んでしまった

244

最終章 あなたと二人で来た丘から――

249

雨の
温州蜜柑姫

第一話

雨の
温州^{おみ}
蜜柑^{かん}
姫^{ひめ}

第一章 雨の午後は霧に昏れて

雨は、巴里の街のマロニエの幹を濡らすように、この日本の櫟並木の上にも降り注ぐのだろうか。

物倦い雨の昼下がり、表参道の石畳に降る雨を眺めながら、高階（旧姓 醒井）涼子は物思いに耽っていた。六月の午後に降る雨が、彼女には感傷が過多だったのかもしれない。

それは五月の巴里——シモンゼリゼ、コンコード、プーラウニユの森、プラタナス、マロニエの花、そして、石畳の続く下町の辻々。

「あの時、私はただあの人の胸に凭れていさえすればよかったのだわ……」

涼子はただうっとりとして、三週間前の懐かしい巴里の日々を思い出していた。

欧州へ単身赴任中の、商社勤務の夫。「三カ月といえ

ば短期間だろう」という言葉を残して一人旅立った夫——その招きで旅行者となった涼子。夫の足手纏いになつてはと思い日本の地に留まった涼子にとって、それは久方の光のどけき久し振りの蜜月であった。つまり分かりやすくいえば、懐かしくも心安まる日々であったのだ。

見知らぬ異国のカフェテラスに一人腰を下ろし夫が一日の労働から解放される時を待つ。そのときめくような胸の高鳴り。見知らぬ国でただ一人の頼りともなすべき人をただ一人あてどなく待つ間のただ一人の心細さが、涼子にとってはどんな失敗も「ありがちのこと」と言つて許される甘酸っぱい解放感へと変わつてはいた。

フランス人の男が異邦人の彼女に話しかける。ニッコリと微笑み返す涼子。英文科出身の彼女にはフランス語が出来ない。

ただ笑い返す涼子。殊更に困つたような表情を作つて話しかける若きフランス青年。日本ではギクシャクとするシチュエーションが、「オー、ノー」の一言でささやかなアヴァンチュールに変わる。

フランス語しか話さない人間達の中で、フランス語の出来ない人間がどのようにしてコミュニケーションを交

わすということが出来るのだろうか？

夫を待ち受ける日本人の妻が、どうしてフランス人の青年に機知に富んだ言葉を返すことが出来るのだろうか？

日本でさえ「神秘的」を謳われる涼子の微笑は、マロニエの花咲く巴里の空の下、馥郁たる香りを秘めて、神秘に輝き渡った。ああ、貞淑に身を寄せることの安らぎに身を寄せて、つかの間の危険な香りが危険だった。旧姓醒井・現高階涼子は、改めて結婚した女の幸福を噛みしめていた。「これがパリなのだわ、これが人妻の住むパリなのだわ」と。

「もっと危険にならなければ、進んで危険に身を委ねなければ」

アブサントとマロニエの花の香りが、涼子を大胆にさせた。

「思いきってフランス語を使ってしまおう。たとえば蓮葉な娼婦のように……、それが私には似つかわしいのだわ」と。

涼子はいかがわしく唇を尖らせて、鼻にかかる声で言った。

「NON」

「ふふ……」

涼子は一人微笑む。

表参道に面したマンションの窓ガラスを、雨のしずくがひんやりと濡らして行く。なつかしい恋の思い出に頬を燃やす人妻の熱い頬と、ひんやりと冷たい窓ガラスの質感によく合った白いベルギーレースのカーテンはよく合った。

「もしもあの時、悠吉さんが姿を現わさなかったら、私達はどうなっていたのかしら……」

危険な恋の予感が胸を包む。

「今日あたり、窓ガラスのお掃除をしなくちゃいけない」と思っていたのだけれど……」

唐突に涼子はそう思った。現実には、いつでも涼子のロマンティシズムの邪魔をする。邪魔をして、でも現実はいつだって涼子のロマンティシズムを彩る白いベルギーレースのカーテンになってしまう。フランス語で言うロマンティシズムとはなんとロマンティックなのだろうと涼子は思った。

「でもいいわ……、だって、外は雨なんですもの」

どうやら掃除はやめるらしい。

遠い雨模様の向こうに、かすかに頬を染める巴里の街の紫陽花の花が見えたと思った。雨はしとどに降り、冷

たい外気がクリスタルな窓の透明度を高めて、醒井涼子はカトリューヌ・ドヌーヴになっていた。

「私だって、まだ、男の方に声をかけられることがあるんだわ……私だって、まだ……」

五月の巴里の街角で、彼女に愛を囁きかけた異邦の若者の彫りの深い横顔をぼんやりと思い浮べ、「悠吉さんとあの金髪の彼とではどちらがハンサムなのかしら」と考えながら、涼子は雨に濡れる表参道の石畳を眺めていた。勿論、東京の原宿にある表参道の歩道はアスファルト舗装で仕上っているのだけれど、追憶に濡れる涼子の瞳には、石畳もアスファルトも、ほとんど違いはなかったのだった。

「あそこにある白い椅子……あれは、若い人達だけの特権なのかしら。あのキイウエストクラブの白い椅子は、若い恋人達が愛を囁く為だけの舞台装置なのかしら……」

でも、私はもう、三十になってしまったけれど……、きつと、あのフランス人のあの人とあそこに腰を下ろしたら、きつと若い方々は、腰を抜かしてしまうでしょうに……」

イーブ・サンローランの白いブラウスを身に纏った涼子は、「やっぱり第二外国語は必要だったんだわ」と思っていた。涼子の第二外国語はフランス語で、在学当時の彼女は、どうして英文学科にフランス語が必要なのかしらと、いつでもいぶかしく思っていたものだったのに。

「フランス語の試験の時には、あんなにも苦しんだくせに……。そう……。でも、今ならもっとフランクに、フランス語に対しても取り組めるような気がする……」

面喰いの涼子は、今やとと学問というものの持つ重い桎梏から解放されたような気がしていたが、ここ当分フランスへ行く予定などというものはまったくなかったのが、いたぶるにうらがなしいバイオリンの響きのようにせつなかった。

「私は人妻だもの……。青春というものは、終わってしまったその時から、いつだって後悔というものが始まるものなのね……。いつも……。私も、もう少しのびのびとした青春時代を送っていられたら……」

涼子は思った。

「でも、もう終わってしまったんだわ……。いつも、後悔ばかりしている涼子。もう青春は、帰ってこないんだわ

……。だって、私はもう……。人妻なんですもの」

「人妻」——その言葉の持つ、あえかにも美しい響きが涼子を酔わせる。美しい人妻には、椿の花がよく似合う。

「いけないわ、私にはもうそれが出来ないの……。だって私はもう、結婚している夫のいる人妻なんですもの……」

恋人達の傘が通り過ぎて行く雨の表参道の石畳を眺めながら、涼子は思った。雨の歩行者天国の、人通りの少なさがなぜか哀しい……。

「私はいつも、人とは違うのだわ……」

冷たく濡れたアスファルトの、その情感を拒むような黒い冷たさが、虚ろな涼子の胸にしみて行つた。

「お午の支度をしなくては……。いつまでもきりがいいわ」

そう思つて、涼子はそつと涙を拭つたが、しかしこの雨の中を、聡子はどこへ行つたのだらう？ 三歳になる一人娘のことをぼんやりと考えて、涼子は黒檀製のサイドボードの上にあるアール・ヌーヴォー様式の置時計に目をやった。美しい時の女神は、永遠に美しいまま、表情も変えずに過ぎ行く時の文字盤を支えている。

台と女神像はイタリア産の大理石で、時計は一時五十分を過ぎていた。

「あら、もうこんな時間？」

涼子は思った。

「聡子はどこへ行つたのかしら？ いい加減、もうお腹が空いていてもいい頃なのに……」

そう思う涼子の耳に、電話のベルが聞こえて来た。「こんな時に誰なのかしら」

R・R・R・R・R……。四LDKのマンションにプッシュ・フォーンの音が響く時、涼子はいつも、夫のいない空虚さと部屋の広さを感じた。この住居に一人では広すぎる。

「はい、高階でございます」

そう答える涼子の耳に、公衆電話のブーンという発信音が突き刺さつた。

「高階さんだね？」

聞き慣れない男の声が後に続いた。

誰だろう？

悠吉が不在の涼子の家に、男の電話がかかって来ることは滅多にない。涼子にはほとんど男友達がいなかった

し、悠吉の友人は、ほとんどが悠吉の不在を知っていた。遊び上手の男達にとつては、引つ込み思案な高階（旧姓Ⅱ醒井）凉子という人妻は、そうそう魅力的な存在ではなかったのかもしれない。それとまた、仕事に忙しかつただけなのかもしれない。悠長な人妻と気長にお付き合いをしている暇など、ビジネス社会の男達にはあまりなかつたのかもしれないのだが、そんなことはみな、凉子の胸の内とは遠く隔つた、あまりにも遠い日本の現実である。

「誰だろう？」

と凉子は思った。男の人ならまず、悠吉さんを除いて、「悠吉さんのお父様」。それから「義弟^{おと}の啓治さん」。時々業務連絡をいただく、会社の「高柳さん」。それから守屋という、悠吉の大学時代の後輩に当たる男。この男はわりと頻繁に、悠吉の留守宅に電話をかけてよこす。凉子は、この男だけははっきりと嫌いだから、この男の声だけは識別出来る。守屋ではない。誰だろう？もしかして、あの大学時代にお付き合いのあつた滝上さんでは——。

「高階さんだね？」

男の声が念を押すように繰り返した。

「はい？」

と注意深く答えながら、凉子は「誰だろう」と考え続けた。

守屋ではない。高柳さんでもない。啓治さんでもない。もしかしたら……、まさか……、大学時代にお付き合いしていた「滝上さん」……、ではない。第一あの方はもつと澄んだお声をしていらしたし、私が結婚してから、いえ、結婚する前からだつて、もう何年もあの方のお声はお聞きしていないのだし……。でも、このどこか懐しい思いのするこのお声は、どなただろう？もしかすると、それはひよつとして「お義父様^{おと}」——今まで一度も直接にお電話をいただいたことはなかつたけれども、失礼があつてはならないと思つて、お声だけは決して忘れないようにしているのだけれども、でもお義父様のお声はこんなようではなかつたような気がするのだけれども。お義父様のお声はもう少しカン高くて、こんなに雨の午後に似つかわしい響きを持つていなかった筈だと。

だとすると——。

「奥さん、よかつたら、ちよつとドライブでもしないか

ね？」

雨の午後にふさわしい、低い男の声は、唐突なことを涼子に告げた。

「はあ？」

虚を衝かれて、涼子は思わず間の抜けた声を出してしまった。

「高階でございませうが」

「奥さんだろ？」

「はい」

涼子は、ひよっとしたらこれはイタズラ電話ではないかと思つて、警戒心を高めた。

「なんでございませう？」

「だからさ」

相手の声は急に碎けた調子になった。

「これからちよつと、ドライブでもしないかつて、言つてゐるんだよ」

「はい……」

そうはいひはしたものの、よく分からない。かつて若い男からかかつて来たイタズラ電話の応待に、それとも知らず「はいはい」と小一時間、律儀に相槌を打ち続けた前科のある涼子のことだから、そうはならじと、そのまんま黙つて考え込み始めた。

しかし「はい」と言つたまま黙りこんでしまえば、その「はい」がそのまま暗黙の「YES」になつてしまふことを、慎重な涼子は知らなかつた。

「奥さん」

電話の向うで、男は少し焦れていた。まだ男は、醒井（現・高階）涼子という女を知らなかつたのだ。

「はい」

涼子は答えた。

「はい」つてさア、奥さん、あんまり素直にうなずかないでくれないかなア。いきなり見ず知らずの男からドライブに誘われてだよ、「はい」つていうのはないと思うよ。もう少し不思議がるのがホントじゃないか？」

そう言われて、涼子は驚いた。ホントにそうだと涼子は思った。「また間違えてしまった。ホントに少し反省しなければいけない」と思ったが、しかし涼子はどうしたらいいのが分からなかつた。

沈黙が八秒ほど続いた。

「奥さん」

「ええ」

男がなにか答え方を教えてくれるのかと涼子は思ったが、しかし男の方は焦れていた。

「百円玉があんまりねえんだ、話は手短かにしようぜ」